授業科目名	仏教と人生	担当教員名	塚田　博教
必修/選択	必修	開講学年・学期	1年　後期　(年間開講数　1講座)
科目区分	基礎科目	単位数	2単位（30時間）
施行規則に定める科目区分　等	外国語、体育以外の科目	授業方法/担当形態	講義 / 単独
		特記事項	
授業の概要 及び 全体目標	幼児期における心の教育の重要性は言うまでもない。しかし、子どもを取り巻く環境の急速な変化の中で、功利的な価値観のみが提供されている感が否めない。仏教が永い時を経て培ってきた智慧と慈悲の心を、具体的な事例に当てはめて検討していくことによって、学生の幼児教育への意識を深く豊かなものへと促していきたい。		
到達目標	仏教には永い歴史で培った経験と叡智がある。保育の現場だけではなく生涯を通して生きる気づきに出会ってほしいと思う。 ①仏教・宗教に対する誤った先入観や偏見を取り除く。 ②人間(自己)を内観し把握する。自己を見ない者に人間は見えない。自己も一人の人間であることを理解する。 ③現実世界を直視する。仏教は常に現実の苦悩の上に説かれる。現実から目を背けてその解決に当たることはできない。 ④共感的理解を深める。自らが多くの支えの上に成り立っていることを知る時、他者への信頼感や共感的理解が深まり、援助的人間関係が築けるようになる。 ⑤個・孤の尊重。一人ひとり皆違っているが、その立場を尊重することが出来てこそ、本当の平安な心が訪れる。		
テキスト	使用しない(適時、レジュメを配布してテキストとする。)		
参考書・ 参考資料等	必要に応じて紹介する。		
成績評価の方法	「学習への積極的取り組み」～受講態度と発言（20%）「自己の内省と展開」～意識調査・レポート（30%）「講義全体の理解」～試験（50%）		

授業計画	授業の内容	到達目標番号
第1回	・自己紹介・講義受講に対しての諸注意・アンケートによる意識調査・序論(宗教・仏教とは何か？など)	①,②,③,⑤
第2回	・ブッダの生涯～　ブッダの生涯について紹介し、仏教の誕生理由を学ぶ。また、仏教の基本的な思想、例えば三法印や因果律、縁起などについて考える。	①,②
第3回	・ブッダの苦悩～　ブッダの出家の原因であり、仏教の根本命題である四苦八苦や孤独といった人間が根源的に抱えている苦悩の実相と課題について検討する。	②,③,④
第4回	・煩悩～苦悩の根源と考えられる煩悩。その中でも代表的な三毒の煩悩を取り上げ、我々日常生活の中にある自己中心的な価値観を問い直す。	②,③,④
第5回	・親鸞に学ぶ　自己の虚妄性と真摯に向き合った僧侶。その生涯を学ぶことによって、ますます傲慢で自己中心的になっていく現代人の姿を相対化する。	①,②,③
第6回	・自己を習う～善人と悪人～　自分をどのように捉えるかは最も難しいこと。まして、他人のことは更に難しい。エゴグラムなどを応用しながら自分と向き合いたい。	②
第7回	・六道輪廻…迷いの世界。私たちが煩悩をもって生き創り出す世界を具体的に現したもの。そこから、現代社会に生きる人間の姿を振り返る。	②,③
第8回	・極楽浄土(解脱)…悟りの世界　帰ることのできる場所のある幸せについて考える。全ての者が救われることを誓った願いが結実した世界であり、今、現に私たちを照らし続けている世界であることを学ぶ。	④
第9回	・ブッダ(智慧と慈悲)　仏教徒の究極の目標は、自らがブッダになること。すなわち、成仏することです。つまり、自分の幸せと他者の幸せを同等に考え、行動を起こすことのできる存在になることです。	④,⑤
第10回	・いのちの大切さとは　当然のごとく語られるＱＯＬ。しかし、本当にそうであろうか。現実の世界でどのようにいのちが扱われているかを紹介し、本当のいのちのクオリティーについて再検討する。	②,③,④,⑤
第11回	・避けることのできない死　死は生と表裏一体でありながら、日常では忌み嫌われ、あまり語られることがない。しかし、不可避な死を受容してこそ見えるいのちの有り難さがある。	②,③,④
第12回	・アシュリー・ヘギの生き方に学ぶ(ビデオ鑑賞)　プロジェリアという難病により、およそ十倍の速度で老化する少女の生き方と、彼女を見守る人々の姿に、生きることの意味を学ぶ。	①,②,③,④,⑤
第13回	・みんなちがって　みんないい　なぜ、喧嘩や戦争は繰り返されるのでしょう。子どもの喧嘩どのように向き合うか。その考え方の糸口を、早世の詩人、金子みすゞさんの詩から学びたいと思います。	①,②,③,④,⑤
第14回	・仏教と福祉・教育　仏教は古くより福祉・教育と関わりを持ってきた。それは、人の苦楽の解決を考える上で欠かせない問題であるからである。仏教の立場からの現実的な課題を提示する。	③,④,⑤
第15回	・講義の総括・試験に関する諸注意	①,②,③,④,⑤
定期試験	筆記試験	